

19世紀末から20世紀初期における
モンゴル文学のいくつかの小ジャンルについて
—「ウグ」と「ヤリア」と「ウルゲル・ウグールレグ」—¹

ダシルンベ・ガルバートル (Dashlkhumbе GALBAATAR)
/モンゴル国立大学総合科学部人文学系文学芸術学科教授/

文学の新しいジャンルは、偶然の産物でもなく、時流に乗って自然発生したものでもない。文学の新しいジャンルは、社会的かつ時代的な探求と要求の産物であり、当該の民族文学に大きなジャンルが誕生する前段階の中間的な特徴をもつ小さなジャンルとして生まれ、将来の大きなジャンルの形式、書法、構造、構成の基本的形態をもつ表現上の諸要素を内包している場合が多い。また文学の転換期（口承文芸から書面文学への転換期、古代文学から近代文学への転換期、古い社会経済制度から新しい社会経済制度への転換期）における思想的刷新が民族文学の大きな飛躍と転換に影響を与える特殊な条件の下で、中間的な特徴をもつ多数の小ジャンルが生まれ、それらがお互いに結合し、次第に一つの化合物になることによって、新しい特殊なジャンルが誕生する現象もよく見られる。また文学における新しい探求のプロセスや刷新の段階において、口承文芸、書面文学、神話、寓話といったようなジャンルにおける手法上の結合や実験から新しいジャンルが生まれる場合も多い。

モンゴル国立教育大学の文学・新聞学科の研究者たちが「1921年の人民革命後の社会、経済、精神の領域における変革、刷新、復興にしたがって、モンゴルの口承文芸と書面文学の伝統がヨーロッパ、とりわけロシアの古典文学の影響によって、散文作品のジャンル、主題、芸術形象、言語修辞、詩学の面で根本的に刷新された」² ことについて記している。まさにそのような刷新の段階で、古い伝統に基づいているが、内容的には新しい時代と主題を表現した短編小説の一つの特殊なジャンルが精力的に発展してきた。それが、時代と主題の発展の歴史的なプロセスと結びついて現れてきた「ヤリア (Яриа)」と呼ばれる一つのジャンルなのである。「ヤリア」は寓意的かつ風刺的・滑稽的な作品であり、「ウグ (Уг)」や「ウルゲル・ウグールレグ (Үлгэр-өгүүлэг)」というジャンルと常に混同されてきた。

1. 「ウグ」と「ヤリア」

モンゴル研究者のG.I.ミハイロフは「“үлгэр”, “өгүүлэг”, “өгүүлэл”, “хэлсэн нь”, “Тэмшил”というような用語は、...名称はそれぞれ異なるが、原則的には何も違いはない。これらの用語はすべて意味的には似かよっている。しかしながら、ホーリチ・サンダクの韻文作品については『ウグ』という用語がより適切であると考えられる」³と述べているが、「ヤリア」については言及していない。

¹ (訳) 岡田和行 (OKADA Kazuyuki) (東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授)

² Г.И.Михайлов, *Литературное наследство монголов*, Москва, 1969, 133-р тал.

³ Мөн тэнд.

また、モンゴル研究者のL.K.ゲラシモービッチは「『ウグ』は内容的には自分自身が受けた不誠実で無慈悲な行為を非難する動物たちの不平不満を描いている。『ウグ』はたいてい口語形式で書かれた韻文形式の作品であるが、散文形式の作品もあり、教訓的な意味をもつ語句で終わる」と述べている。

S.ロブサンワンタンは「モンゴルの短編小説の歴史において、インジャンナシの短編小説は哲学的な思想、社会的・文民的な傾向、批判的な姿勢が特徴的である。ホーリチ・サンダクの『ウグ』という短編小説には口承文芸の影響が顕著である。モンゴルの散文作品の小ジャンルには『ウグ』と『ヤリア』という興味深い形式があった⁴と述べ、これらの作品の形式、ジャンルの典型、芸術的な特殊な手法が後の1920年代の昔話風短編小説（үлгэр-өгүүлэг）や風刺的・滑稽的短編小説（хошин болон шог өгүүлэг）に受容されたと指摘している。ここで興味深いのは、「ウグ」と「ヤリア」という作品を分けて記述していることであり、「ウグ」と「ヤリア」を二つの別々のジャンルであると見なしていることである。

「ウグ」という作品は、おもに沈思と熟考、思考の反復、精神の転変、意味の曖昧化、苦悩の表出、困惑、憂鬱、羨望など、主人公の心理的な転換を開示するのに適している。実際のところ「ウグ」という作品にはこのような特徴が明確に反映されている。そもそも「ウグレル・ヤリア（үглэл яриа）」という語は、何らかの返答を該当者、読者、聴衆に求めているわけではなく、自分自身あるいは他者に向かって語る一方的な独白（モノローグ）を意味している。

その主たる内容は、批判的かつ教訓的な傾向をもち、後悔と理解、風刺と隠喩、対比と例示、比喩と同化、比較と対照などからなる。またその目的は、自然災害と社会的災難、抑圧と搾取、古びた秩序と伝統などに対する批判にあり、誠実と不誠実の衝突、罪を犯した者などを隠喩法によって他の事象に変換し、間接的に叙述するという特徴をもっていた。これを見ると、表現方法、人物形象のシステム、明示、目的、内容、矛盾、構造、主語の構成など多くの点で「ヤリア」と「ウグ」はお互いに異なっていることがわかる。

それに対して「ヤリア」という作品は、比較的短い対話（ダイアログ）からなり、起こっている事件の原因について相互に対話する主人公たちの思想的葛藤に基づいている。「ヤリア」の中には、昔話の対話における異化や擬人法を使った作品（自動車たちの対話、鉛製の活字たちの論争、三匹の尾の短い野ネズミの会話など）があり、これらはある面では昔話風の（үлгэрлэг）特徴をもっているといえよう。「ヤリア」という作品は、読み書きのできない大多数の人びとにとって覚えやすく、感動的なクライマックス、興味深いプロット、反復的な思考を要求する隠された主題（サブテキスト）を動物や事物の発する証言、言辞、論争の形式に転位させ、そこに浮かび上がってくる「隠された」意味（批判的・政治的な内容）を民衆が自身の境遇に照らし合わせて正しく理解するよう導くのである。「ヤリア」はまた、口頭で伝承するのに適しており、民衆の間に急速に流布する可能性をもち、戯曲やドラマと同様に実在の主人公たちが各自の行動を起こし、各自の考えを正当に役割分担し、それを具体的かつ適切な性格を付与された動物や事物に託して表明するという特徴が、読者、聴衆、観衆の作品理解を助けていた。

したがって、清朝支配末期および人民革命の直前・直後期に新しい社会体制へ移行する段階で、当時の若い文学者たちがこのような特殊なジャンルを社会的な探求と要求にしたがって採用したものと考えられる。また革命初期の若い作家たちにとつ

⁴ С.Лувсанвандан, *Монголын орчин үеийн уран зохиолын онол түүхийн асуудалд*, Улаанбаатар, 1973, 85-р тал.

て、このような伝統的なジャンルの作品を書いて実践経験を積むことが適切だったばかりでなく、このジャンルの対話という簡便な構成と簡潔で短い形式が自身の思いを秩序立てて表現するのに便利だったものと思われる。この時期に「ヤリア」と並んで精力的に発展していた「ウグ」という「独白」作品の小ジャンルもまた、文学の独立したジャンルとして存在していた。

この二つのジャンルには形式面だけでなく、以下のような多面的な特徴がある。

1. 「ウグ」がおもに韻文形式の作品であるのに対して、「ヤリア」は純粋に対話形式に依拠した戯曲、もしくは散文作品の類型をもっている。

2. 「ウグ」では「不平不満を抱いた」一人の主人公の人物形象の独白（モノローグ）、もしくはその心的世界（悲哀や憂愁など）を開示した叙情的なトーンが重要であるのに対して、「ヤリア」では批判的なトーンと傾向が優勢であり、相互の対話（ダイアローグ）や議論、論争が主たる役割を果たしている。

3. 「ウグ」では主人公に敵対する勢力が自然、社会、人間活動に関係する一般的な矛盾、葛藤から生じるのに対して、「ヤリア」では相互の討論の相手がそれぞれ自身の思想や立場を守るために矛盾、葛藤が生じ、社会や人間世界に共通して見られる欠陥や不正を議論の結果として了解させる点が特徴的である。

4. 「ウグ」は叙情的なジャンル、「ヤリア」はドラマ的・叙事詩的なジャンルに含まれるそれぞれ独立したジャンルである。

5. 「ウグ」においては独白する一人の主人公の不平不満、悲哀、寛容、慈悲などを通して、間接的な隠喩法によって社会的な不平等を批判する色調が優勢であるが、批判されている側の実像は具体的に明示されず、抽象的かつ一般的な要因が示されるだけである。それに対して、「ヤリア」ではそれぞれの思想と立場を体現する討論者たちがいくつかの人物形象を有するとともに、おもに批判、宣伝、教訓の色調が濃い点に違いがある。

たとえば、ホーリチ・サンダク [1825~1860] の「春に解けて流れる雪が語ったこと (Хаврын хайлаад урсаж байгаа цасны хэлсэн нь)」(自然の摂理について)、「子ラクダから引き離されて隊商に雇われた母ラクダが語ったこと (Ботгоноос нь салгаж жинд хөлсөлсөн ингэний хэлсэн нь)」(動物について)、「七十歳の侍衛オチルが二十歳の若い娘を妊娠させたことを語ったウグ (Далаад насны Очир хиа хориод насны залуу бүсгүйг жирэмслүүлснийг хэлсэн үг)」(人間の生活と倫理について)などは、寓意的・風刺的・滑稽的な形式の作品である。一方、ダイ・ゲーシ・アグワーンダンピル [1700~1780] の「アグワーンダンピルのウグ (Агваандампилын үг)」、イシサンボー [1847~1896] の「孤児(みなしご)孤児のカモシカの子のウグ (Өнчин янзаганы үг)」などの芸術的かつ詩的な「ウグ」作品は、ノモン・ハン・アグワーンハイダブ [1779~1838] の「ウシとヒツジとヤギの三匹が修行僧と交(か)交わしたヤリア (Үхэр, хонь, ямаа гурвын гэлэн тойнттой хүүрнэсэн яриа)」、「長髪のツェレンピルなる人物の闘争の書 (Урт үст Цэрэнпил хэмээгдэхийн тэмцлийн бичиг оршивай)」、「カラスとカササギの交わしたことば (Хэрээ, шаазгай хоёрын хэлэлцсэн үгс)」、「オオカミとお殿様のヤリア (Чоно, ноён хоёрын яриа)」や、ゲンデン・メイレン [1820?~1882?] の「子イヌとネコとネズミの昔話 (Хав, муур, хулгана гурвын үлгэр)」、「野生のラバとオオカミとカラスの昔話 (Хулан, чоно, хэрээ гурвын үлгэр)」など、対話に基づく鋭い矛盾と葛藤を描き、平等に役割分担された何人かの対立する主人公の登場する、芸術形象の統一的なシステムをもつ「ヤリア」作品と比較すると、明白な相違のある

ことが注目される。

そもそも「ウグ」作品は、人間の抑圧と搾取、貧困生活、自由のない無知蒙昧な状況を動物や事物の形象に異化させて、それらを彼らの悲哀と苦悩の形式で叙述する。それに対して「ヤリア」作品は、おもに社会生活の具体的な状況を明確に叙述し、批判的な姿勢で物事の正邪を道徳的に判別し、それらをすべての人にとって模範的な教訓となる人間、動物、事物の形象による対話・論争の形式で表現する。このような「ヤリア」作品は近代文学、その中でも20世紀初期および1920-1930年代の文学に受け継がれ、新しい内容で豊かになり、近代文学の形成にとって一つの重要な伝統遺産となったと確実に断言できる。

しかし、このことは「ウグ」と「ヤリア」に類似点が皆無だといっているわけではない。いいかえれば、「短編小説 (өгүүлэл)」、「掌編小説 (туурь)」「譚詩 (дууль)」「昔話 (үлгэр)」「昔話風短編小説 (үлгэр-өгүүлэл)」などのジャンルには多くの共通点があり、これらはそれぞれ「叙事詩 (туульс)」作品に起源をもつ独立したジャンルとして区別されてきたが、原則的には同類であることと似ている。

このようなジャンルの作品は、さまざまな国や民族の芸術に、当該の民族の生活様式、伝統文化、信仰、社会精神、思想的葛藤、生業の特徴、生活上の特殊環境、教育と文化の発展レベルとその類型、民族思想の特徴などを深く反映した短い大きさの作品として多様な形式で生まれる。そして、当該の時代に自らの役割を果たした後に、その発展法則にしたがって、次の時代の大きなジャンルに統一されたり、中途半端に捨て去られたり、当該の時代の文学の実体を保持したまま歴史に残されたりする現象は、各民族文学が発展段階を下から上へと昇ってゆく過程でよく見られる法則ともいえよう。

2. 「ウルゲル・ウグールレグ」と「ヤリア」

研究者たちはこれまで、「ウルゲル・ウグールレグ (昔話風短編小説)」のジャンルについて、文学が古い時代から新しい時代に移行する際に、時代的な特徴を保持してきた特殊な形式だと見なしてきた (G. ジャムスランジャブ、D. ヨンドン、Ch. ジャチン、S. ロブサンワンダン、P. ホルロー、Kh. サンピルデンデブ、L. K. グラシモービッチ、G. I. ミハイロフなど)。実際にこの社会の転換期に、形式面では昔話 (ウルゲル) 風で、内容面では当該の時代の敏感な問題を取り上げ、社会転換期特有の類型を保持した短いジャンルである「ウルゲル・ウグールレグ」が精力的に発展してきた。その構造と芸術手法を見ると「ウルゲル・ウグールレグ」は多様だが、昔話 (民話) の強力な影響下に書かれた、その時代の問題を隠喩的・寓意的に表現した短編小説の最初の新しい形式であった。一方「ヤリア」は、口承文芸というよりも、談話の伝統に基づいて昔話化した、散文作品と戯曲作品が合体化した類型をもつ新しい形式であった。

1920-1930年代の作家たちは、口承文芸を大なり小なりある程度利用して「ウルゲル・ウグールレグ」を書き、それが現在の新しい芸術的な短編小説 (уран өгүүлэл) が生成発展する前身となったことを否定することはできない。新しい時代の人びとの模範と教訓となるよう書かれた「ウルゲル・ウグールレグ」と並んで、伝統的な「ヤリア」も新しい内容で豊かになり発展した。

たとえば、Ts. ジャムスラン (J. ツェヴェーン) [1881~1940] の「偉大な貴族ホーチン、賢明な教師ヨスト、ロシア人マガド、漢人ヨスロルらが茶会を催し、疑心なき国で論争した四辻(よつつじ)四辻 (Их ноён Хуучин, мэргэн багш Ёст, орос Магад, хятад Ёслол нарын цайлж, ажиггүйн оронд зөвлөн тэмцсэн дөрвөн замын уулзвар)」(1914年)

、D.ナツァグドルジ [1906~1937] の「黴菌(ばいきん)黴菌のヤリア (Нянгийн яриа)」、「シャグダルスレンの「頂子(ジンス)頂子を頭に載せた野ネズミの昔話 (Жинст одгойн үлгэр)」、「ザナバザルの「五体の屍(しかばね)屍が互いに争った昔話 (Таван цогцос харилцан тэмцсэн үлгэр)」、「M.ヤダムスレン [1904~1937] の「蒙昧な会話 (Ухваргүй ярилцаан)」、「注目し信奉した尼僧の老婆と嫉妬し憎悪した僧侶の正体 (Анхаарч биширсэн чавганц, агаархан хорссон лам хоёрын үнэн байдал)」、「S.ボヤンネメフ [1902~1937] の「大小の鉛製の活字の巧妙で風刺のきいたヤリア (Том жижиг тугалган үсгийн уран хошин яриа)」、「自動車の口げんか (Моторт тэрэгний хэрүүл)」、「三輪オートバイ (側車付オートバイ) の苦しみ (Гурван дугуйтын зовлон)」、「G.ナワーンナムジル [1882~1954] の「弁舌巧みなネズミと地ネズミが運命的な意味ある言葉を語り合う (Уран өгүүлэлт хулгана, зурам утга учралт үгсийг өгүүлэлдэв)」、「D.センゲー [1916~1959] の「鞣革(なめしがわ)鞣革の長靴の話 (Савхин гутлын өгүүлэл)」、「(1940年)、さらにTs.ダムディンスレン [1908~1986] の「富める者が喜びなき言葉を語り合う (Баячууд баяргүй үгс хэлэлцэнэ)」、「ホコリタケ [埃茸] の中に生えたホコリタケ (Дүлий доторх дүлий)」、「残忍な俗人の会話 (Хар харгисын ярилцаан)」、「嘘つきの与太話 (Худалч хүний хөөрөлдөөн)」、「(1929年) など、多数の「ヤリア」作品が革命直前および革命後に書かれた。これらの作品では、社会的な抑圧と搾取の原因、自由と解放のための闘争、学問を学ぶ意義、年長者の教えに対する敬意、自然と世界の現象、モンゴル人の生活様式の特徴、慈悲心、正直に平穩に生きることの効用、新しい生活のもつ進歩性などについて教訓的に叙述され、また批判的に論じられることによって、新しい書面文学の最初の形式が1920年代に新しい内容で豊かになった。

これらの「ヤリア」作品の主要な特徴は、古い書面文学の伝統、たとえばアグワーンハイダブ、ドルジ・メイレン、イシサンボーなど、前時代の文人たちの「ヤリア」形式の作品の伝統を受容し、さらに時代と体制が新たに变革され、社会的な欠陥を批判する新たな思想が浸透しているところにある。また書法や芸術形象などの表現の面で、現代の散文作品における会話部分を積極的に活用しているところにもその主要な特徴が存する。しかしながら、「ヤリア」作品を「ウルゲル・ウグールレグ」作品と並行して発展してきた一つの特殊な形式だと限定的に見なしてはならない。「ヤリア」作品はその役割と目的において多くの面をもつが、ジャンルと作品構成の面から見ると、戯曲作品ときわめて近縁性があるばかりでなく、叙事詩という大きな形式の作品の発展においても重要な役割を果たしてきたと見なすことができる。

これらの作品には、権力者(王侯貴族、聖俗封建諸侯、高級官吏など)による抑圧と搾取の苛酷な圧政を憎悪し自由と解放を獲得するために闘う民衆の姿、修学の恩恵、年長者の教えの尊重、社会道德、新旧の思想間の公然あるいは非公然の葛藤と衝突、生活上の闘い、慈悲心、邪悪で不当な思想との抗争、誠実と不誠実の要因、新しい生活、新しい思想、新しい生き方などが描かれていた。昔話の様式を利用し、当時の社会における反抗の実態を革命的な立場から描いた「ヤリア」作品の形式がこのように圧倒的な力をもって登場してきたのである。その一方で、普通の昔話の筋書の上に新しい思想を好意的かつ肯定的に取り入れた典型的な「ウルゲル・ウグールレグ」形式の作品がTs.ダムディンスレンの「小さな四つの昔話 (Өчүүхэн дөрвөн үлгэр)」、「(1927年)、「賢い子羊 (Цэцэн хурга)」、「デンデブの「小さな錠前が壊れたわけ (Бяцхан цоож эвдэрсний учир)」、「(1926年)、「粘土でできた兵隊について (Шавар цэргийн тухай)」、「(1926年)、「ザナバザルの「小さな昔話 (Бяцхан үлгэр)」、「(1928年)、「D.チメド [1904~1932] の「奇妙な昔話 (Сонин үлгэр)」、「(1927年)、「野鴨

（Ангир шувуу）」（1927年）などである。これらの作品は、本格的な昔話（民話）の語り口と人物形象をそのまま活用しており、寓意的に書かれ、教訓的な色彩に富んでいる。このような「ウルゲル・ウグールレグ」形式の作品が「ヤリア」形式の作品と並行して発展した。

たとえば、アカデミー会員Ts.ダムディンスレンは1927年、「年老いたネズミの教えを聞く（Өвгөн хулганын сургаалыг сонсмуу）」「ずる賢いタイプが殺されたこと（Аргат Тайвын алагдсан нь）」「皇帝たちの戦い（Хаадын байлдаан）」「機知を働かす（Аргаар эдлэв）」という四話からなる「小さな四つの昔話」という「ウルゲル・ウグールレグ」の作品集を書き、モンゴルの文学界に登場してきた。これらの「ウルゲル・ウグールレグ」では、道徳的な善悪について、昔話の古典的な語り口を駆使して教訓的に叙述している。この作品は芸術的で味わい深い典型的かつ正式な「ウルゲル・ウグールレグ」作品といえる。たとえば、語り手の年老いたネズミが自分の息子に向かって、

「古老たちの言葉にしたがわなければ
その他大勢のネズミのようになる
年老いているのに若いふりをすれば
老いぼれた獅子のようになる
他者をひどく見下せば、
物好きなアリヤーのようになる
むやみやたらに欲を張れば
馬鹿な息子のようになる
欲にかられて無情に叱責すれば
あのキツネのようになる
敵意に満ちた邪心を抱けば
飢えた泥棒のようになる
自らの分をわきまえて
末永く正道を踏むよう努めなさい」

と教えさとしているが、これらは『スバシド（Субашид）』『パンチャタントラ（Панчагантра）』『甘露の滴（Рашааны дусал）』『白蓮の花束（Цагаан лянхуан баглаа）』など、インド・チベット起源の古典教訓作品の中の詩文や逸話に範を取ったものと思われる。

こうして1920年代初期、新しい革命思想を昔話風に表現した文学の新ジャンル「ウルゲル・ウグールレグ」が産声を上げ、一時的に有力なジャンルとなり、短い大きさの散文作品の一つの特殊な形式として、当時の作家たちに新たに採用された。また「ウルゲル・ウグールレグ」とともに、その時代の現実、時代の趨勢、新旧の矛盾と葛藤、道徳上の複雑で敏感な問題などを昔話風に描いたり、さらに近代的に表現したりして、対話、議論、口論、争論の形式によって構成された一つの特徴的なジャンルが同じように発展し、多数の興味深い作品が現われ、現在まで伝えられてきた。それが「ヤリア」作品である。

1920年代末から1930年代の初めにかけて、作家たちは「ウルゲル・ウグールレグ」「ヤリア」「ウグ」の形式から次第に離れ、内容、主題、技巧の問題を適切に整理した正式の芸術的な短編小説の段階へ移行し、短編小説が真の意味で発展する好条件が整えられた。1930年代初期、偉大な作家D.ナツァグドルジは「旧時代の子（Хуучин хүү）」（1930年）、「お坊さまの涙（Ламбугайн нулимс）」（1930年）、「白い月と黒い涙（Цагаан сар ба хар нулимс）」（1932年）など、古典的なリアリ

ズムの伝統を他の手法や修辞と適切に組み合わせた作品を創作し、S.ボヤンネメフは「隊商人プレブは妙なやつ (Жинчин Пүрэв жигтэй)」（1935年）、「大きなホコリタケ [埃茸] (Их тэнгэрийн дүлий)」（1935年）、「怠け者ゴンボの明日 (Залхуу Гомбын маргааш)」（1935年）など、風刺的な格調をもつリアリズム短編小説を創作した。これらの作品はモンゴル近代文学に短編小説のジャンルが真の意味で形成され確立したことを示している。

Summary

In the “Speech”, a small-sized literary genre written in the form of inward speech by an only protagonist, human’s oppression, miserable life and the uncivilized society without civil liberties are narrated by transforming them into real images of animal or object and in the form of their sadness and hardship whereas “Dialogue”, which is also a small-sized literary genre written in the form of dialogue or debate, visibly tells and tends critically about the reality of social life in most cases. Also, it judges what is right and wrong from the angle of morality and expresses it as a role of a man, an animal or an object which is a good example for the public in the form of dialogue or debate. It is totally reasonable to say that not only have these genres been passed down to the contemporary literature, especially the one of the beginning of the 20th century or 1920-1930s, and expanded and richened by new concepts, but also influenced on the formation of the contemporary literature.

文献一覧

1. Дамдинсүрэн Ц, *Түүвэр зохиол*, Улаанбаатар, 1969.
2. Дамдинсүрэн Ц, *Монголын уран зохиолын тойм*, II дэвтэр, Улаанбаатар, 1976.
3. Ёндон Д, “Үг хэмээх зохиолын тухай”, *Монгол судлал*, Боть VIII, Дэвтэр 7, Улаанбаатар, 1971, 125-132-р тал.
4. Жүгдэр Ч, *З.Агваанбалдангийн гүн ухааны үзэл*, Улаанбаатар, 1978.
5. Лувсанвандан С, *Монголын орчин үеийн уран зохиолын онол түүхийн асуудалд*, Улаанбаатар, 1973.
6. Михайлов Г.И, *Литературное наследство монголов*, Москва, 1969.
7. *Монголын уран зохиолын тойм*, III дэвтэр, Улаанбаатар, 1968.
8. *Уран зохиол шинжлэл*, Улаанбаатар, 2005.
9. Хорлоо П, *Аман зохиол, уран зохиолын тухай*, Улаанбаатар, 1975.
10. Хөвсгөл С, *Д.Равжаагийн “Саран хөхөөний намтар” жүжгийн “Горим”-ын эх бичгийн судалгаа*, Улаанбаатар, 2004.
11. Хүрэлбаатар Л, “Зохиолч Ишсамбуугийн намтар уран бүтээл”, *Хэл зохиол судлал*, Боть XI, Дэвтэр 22, Улаанбаатар, 1975, 261-270-р тал.
12. Эрдэнэтогтох, *Гуларанса, Данзанванжил, Хишигбат*, Хөх хот, 1959.

(丁)